

新座写真歳時記—小暑の頃

目だたざる花の咲きみて半夏生(はんげしょう) (大久保 橙青)

“大暑来たれる前なればなり”という小暑である。ここからが暑中となって、暑中見舞いも出されるようになる。梅雨明けを前にして、本格的な夏の暑さが始まるというわけだ。「文月」などという、柔な語感にはソグワナイ夏の暑さ。これからの二ヶ月は“がまん!” “我慢!” の日々になりそうである。

今当市では市長選挙の真っ最中だ。我々にとっては最も身近な首長選挙だが、何れの候補者にとっても暑さは大敵。一週間の短期決戦ながら、健康に留意し正々堂々の選挙戦を乗り切ってもらいたいものである。当選者には今日より明日、今より未来に希望の持てる、その様な爽やかな市政を期待しようではないか。



夏の甲子園へ向け、各地での地方予選が始まった。県代表が何所であるにしろ、真紅の優勝旗が荒川を越えるのを楽しみにしている。今年は記念大会のため南・北から二校が選ばれるので期待も膨らむ。同じ頃、夏の高校総体各種競技が埼玉県各市で行なわれ、当市の体育館はフェンシングの会場になっている。若い高校生の澁刺とした試合も楽しみである。「暑い!暑い!」と泣き言を言わず、熱戦の観覧席に身を置くのも避暑の為の一方策と言える。夏を楽しみ暑さを味方につけ、いっぱい汗を掻いてこの夏を過ごしたいと思っている。

久し振りに熱気の薄い朝だった。雨模様ながら雲は割りに高い。偶にはこんな日に撮影もと思い、何時ものファームへ向かった。この時期の畑に大きな変化は期待できない。おやじさんが主管する畑はイモ類が主力で、今はじっくりと育成する期間と思われるからだ。と思ってバス停に降りるとおやじさんの作業姿が見えた。ジャガイモ畑で収穫後の整理のようだ。取り残したオジャガが点々とあるが、きれいに整地されている。次への準備だ。



パラパラと雨がきたので遠くからの挨拶だけで森へ入る。レンズを取り替えて、そこに咲く小さな花たちを中心に撮ってみた。夜明け前に降った雨で、どの花もシャキッとした姿だが、小さいだけに彩りは強くはっきりしたものが多い。ショルダ―三脚で手振れを避けたが、這い蹲るような無理な姿勢で息苦しい。中々ピントが合わず苦戦。息を止めてシャッターを切るのに、息が上がって切れない。チョット歳を感じた次第。



秋の花だと思っていたコスモスがかなり咲いている。これからの暑さを凌げるのかと余計な心配をした。ついでに野菜の花を撮る。大和芋の葉の水玉が、射しはじめた陽射しにきれいに光っていた。七夕の日。真夏日の一休みに緑は生き生きとしているが、無理な姿勢が続いたため大汗を掻いた。倒れないうちにと早々に帰路につく。やはり夏は暑かった。

数条の汗にさきがく汗一条（能村 登四郎）